

イベント開催による集客、ブランディング

物販店の減少で薄れつつあった商店街の一体感。「恋」を切り口にした活性化作で元氣を取り戻す。

物販店減少、商店街が機能しない

恋ヶ窪商店会は都道17号・府中街道と都道134号・連雀通りの交わる恋ヶ窪交差点から西へと延びる市役所通りとその周辺をエリアとする商店街である。商店街のほぼ中央に西武国分寺線恋ヶ窪駅があり、国分寺市役所、国分寺郵便局といった公共施設もある。とりわけ市役所は来庁者、市職員や関係者による商店街への一定の経済効果が見込めたこともあり、昭和38年の庁舎建設（当時は国分寺町役場）以来、切っても切れない関係にあった。商店街の名称も平成26年1月までは市役所通り商店会を名乗っていた。通りの周辺には戸建ての並ぶ住宅地があり、近

年は戸建てや商店の建て替えにより集合住宅も増えた。恋ヶ窪駅の乗降客数は1日1万人強あり、ここ20年来、微増減はあるものの安定している。

しかし好条件が揃っているように見えても、商店街の景気は芳しいものではなかった。昭和40、50年代は人口増が著しく、発展を続ける国分寺市とともに活気がみなぎっていたが、平成期に入ると状況に変化が現れる。周辺に大型商業施設ができ、生鮮食料品を扱う店が激減。商店街のシンボリック存在であった鮮魚店や青果店、精肉店などの集まるマーケットが10数年前に姿を消して以降は、生鮮食料品、日用品を扱う物販店がほとんどなくなった。会員は病院、歯科医院などの医療関係、美容室、学習塾などのサービス業で占められるようになった。

物販店の減少により恒例となっていた中元、歳末売り出しや福引きなどの恒例行事も中止となり、商店街としての一体感が薄れつつあった。

突然の市役所移転騒動に危機感

そのような折、平成19年12月、市役所の移転計画が持ち上がる。昭和38年に建設された本庁舎は手狭なため人口増、事務の増加に対応しきれず、庁舎の増設で対応していた。また建築から40年余がたち耐震性にも問題があった。そのため分散した庁舎をまとめ、新たに泉町に建設すると、当時の市長が突如発表したのだった。

市役所とともに歩んできた、当商店街にとっては死活問題。商店街をあげての議会陳情、署名活動なども行った。結果として庁舎移転計画は延ばされた。しかし多くの会員にとり延期された安堵感よりも、これから商店街はどうなるのかという不安の方が大きかった。



通りとこくぼちゃん

た。そこで若手会員のリーダー的存在であった清友龍一氏（前会長）と、市役所移転の議会陳情などで会員を束ねた坂本登央氏（現会長）が中心となり、平成20年度より有志による勉強会「寺子屋」を立ち上げる。若手を中心としたこの会で商店街独自の活性化案を模索していくことになった。

勉強会開催。「商店街とは何のためにあるのか」

勉強会は「商店街とは何のためにあるのか」というところから始まり、会員が思い思いの意見を出し合った。まずは商店街の一体感を出そうと店主の似顔絵入りの手作りマップを作成した。これがまずまずの反響を得たことから、さらに本格的に取り組んで行こうと商店街パワーアップ作戦を利用し、専門家からの指導、アドバイスを受けることにした。店舗ごとにPOPの書き方を工夫したり、商店街のキャッチフレーズを地名の「恋」にかけて「ハートフルなお付き合い」とするなどした。

「こくぼちゃん」でイメージアップ

平成24年取り組みに転機が訪れる。最寄の恋ヶ窪駅を通る西武鉄道より、全国で4つある「恋」のついた駅で「恋駅プロジェクト」を行う、ついでには協力をしてもらえないかと打診があったのだ。

これは地域を巻き込んだ商店街活性化のきっかけになるのではないかと。当時、会長だった清友氏はこの提案に飛びついた。商店街パワーアップ作戦の中小企業診断士からアドバイスを受け「恋まちストリートプロジェクト」を

発足させた。このプロジェクトは西武鉄道のほか、近隣にある武蔵野美術大学の学生とも連携。学生がデザインするイメージキャラクターを前面に押し出し、同年7月7日から8月5日まで商店街を「恋まちストリート」とするというもの。8月4日には西武鉄道のイベントと連動し商店街による「はぁとふるまつり」を開催、恋力アップのスタンプラリーを行うなどして協賛参加することとした。

学生によってどこから見てもハートの形をしているキャラクターがデザインされ、「こくぼちゃん」と名付けられた。「恋まちストリート」の期間中、商店街に50基ある街路灯を、「こくぼちゃん」のオブジェとフラッグで装飾したほか、クッキーやスイーツなど「こくぼちゃん」商品を開発し商店街で販売。通りは「こくぼちゃん」一色となり「恋まちストリート」を演出した。

これからも「恋」を切り口に活性化図る

第1回「恋まちストリート」はメディアなどでも紹介され、期間中、外部から一定の集客の効果があつた。その後、東京経済大学の学生の協力も得て、現在も「恋まちストリートプロジェクト」は継続している。8月に行われる「はぁとふるまつり」は地域を代表するイベントとなっている。

このプロジェクトによって「恋の町」、「ハートフルな商店街」というイ

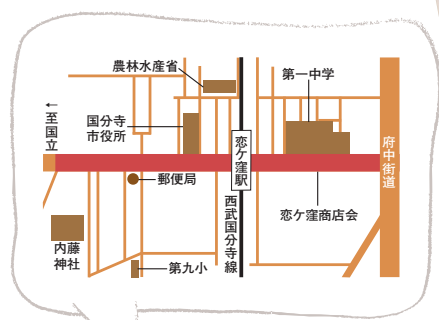
メージが定着したこともあり、平成26年2月より恋ヶ窪商店会を名乗ることとなった。新商店会名の記念イベントとしてこの年の七夕には30代以上の独身男女による「恋ヶ窪で恋活 お料理合コンパーティー」を商店街で開催。また、同年10月にはハロウィンイベントも開催し大勢の参加者で賑わった。

何かひとつきっかけがあればアイデアは湧いてくると、清友前会長、坂本現会長とも口を揃える。街路灯のLED化など商店街内の待ったなしの問題に取り組みつつ、今後も「恋」を切り口にした地域活性化を続けていく。

恋ヶ窪駅のこくぼちゃんポスター



街路灯にかかるこくぼちゃん



- 商店街名 恋ヶ窪商店会
- 会員数 51
- 連絡先 会長 坂本登央（さかもとたかお）
（株式会社サカウエ代表取締役）
- 電話 042-321-3587（株式会社サカウエ）
- URL <http://www.koigakubo.net/>
- 活用施策 商店街パワーアップ作戦

会長 坂本登央



坂本会長（右）と清友前会長（左）

商店街活性化のアイデアは、若くて元気のある会員が集まればいくらでも出てきます。しかしそれを実行に移すには専門家の力が必要だということを一連の取り組みを通して痛感しました。恋まちストリート、はぁとふるまつり、こくぼちゃんなどは商店街パワーアップ作戦の後押しにより実現できたものです。今後は街路灯整備など商店街活動の原点ともいえる安心、安全に買い物できる環境の整備にも取り組んでいきます。